

令和5年度 おぶせミュージアム博物館協議会 議事録

- 1 日時 令和5年11月28日(火) 午後1時半～4時
- 2 会場 小布施町役場
- 3 出席者
 - (1) 委員 浅岡委員 池田委員 原委員 霜田委員 笹本委員 中島委員 春山委員
 - (2) 事務局 鶴田館長 山崎教育長 藤沢教育次長 久保田係長 荒井主任学芸員
越智学芸員
- 4 次第
 - 1 開会
 - 2 あいさつ (教育長)
 - 3 おぶせミュージアム博物館協議会の設置について (館長)
 - (1) おぶせミュージアムの設置及び管理に関する条例第5条の規定による(資料1)
 - (2) 協議会の履歴(資料2)
 - (3) おぶせミュージアム博物館協議会の開催に至る経緯(資料3)
 - 4 任命書交付(教育長)
 - 5 委員・事務局紹介(資料4)
 - 6 会長選出
 - 7 議事 (協議会会長進行)
 - (1) 令和5年度事業について(資料5)
 - (2) 令和6年度事業計画について(資料6)
 - (3) 施設修繕計画について(資料7)
 - (4) 寄贈作品の受け入れについて
 - (5) その他
 - 8 閉会

5 会議の概要

1.開会

2.あいさつ(教育長)

山崎教育長:教育長の山崎茂と申します。朝夕寒さが身に染みてきました。小布施町の里山、雁田の麓、昭和の小説家 福永武彦氏が歩いた「雁田の小径」と言われているところがあるのですが、その周辺のブドウの木々もすっかり紅葉し、新年の芽吹き、再生に備えるころになりました。今日は皆さまご多忙の中、町営おぶせミュージアム博物館協議会に町内外より

ご参集していただきました。本当にありがとうございます。さらに中島千波先生、春山文典先生には遠方よりご来館いただきました。誠にありがとうございます。

令和5年度4月より、ここにおります鶴田館長のもと新体制でおぶせミュージアム・中島千波館が再出発しました。当博物館は、1992年10月22日に開館し30年を昨年度迎えました。そこで、館の振り返りを行ったところ、この当館の博物館協議会においては、2003年より開催の実施記録がありませんでした。また、全国的に指摘され始めている、公立博物館の収蔵品管理の問題は、当博物館においても顕著になるなど、いくつかの課題が見えてきました。そこで今年度は、定期的に関係者会議を開き、協議を重ね、具体的な取組を始めています。その取組のひとつとして、今日、おぶせミュージアム博物館協議会を再開することといたしました。しかし、その間も多くの作品や本、物品等の寄贈や企画展開催をしてくださり、小布施町民の文化芸術の振興や発展、子どもたちの感受性を育むために当博物館を支えてくださってきた中島千波先生、中島美子学芸顧問やご家族の皆様、同じく作品の寄贈・企画展をしてくださった春山文典先生には本当に感謝しています。

直近では、中島美子学芸顧問監修の『おぶせミュージアム・中島千波館収蔵 中島千波作品集』を学校や図書館等の町施設等に寄贈していただきました。この作品集のあとがきに記された想いを大切にしながら、今後も運営をしていきたいと思えます。またこの作品集は、中島先生の版画とともに小中学校の児童・生徒に活用してもらうために、数冊学校図書館等に置いて学習に役立ててもらうようにしました。さらに春山文典先生の作品もできるだけ子供たちが間近で鑑賞できるように小中学校にさらに展示できればと考えています。最後に、今回私はあえて再生・再出発・再開という「再」という言葉を使いました。この言葉について作家・詩人である長田弘さんは『なつかしい時間』という著書で記述しています。「再」という言葉は、前からあったものをもう一度繰り返すという風に捉えがちですが、そうではなくて、新しい始まり、新たな意味と言うものを、今現在という中に、もう一度導き入れようという積極的な意味合いを強く含めて使ってきたように思います。

私もこのような積極的な思いで、博物館館長と協力しながら再度博物館運営に取り組んでいきたいと思えます。今日ここにおぶせミュージアム博物館協議会を再開できることは本当に皆様のお陰様です。ありがとうございます。

3.おぶせミュージアム博物館協議会の設置について

鶴田館長：館長の鶴田典昭と申します。山崎教育長のお話があったとおり、当館の博物館協議会は平成14年度を最後にずっと開かれておりません。せっかくいろんな方々にお集まりいただいたので、ざっくばらんにいろんなお話をご提示いただければ、というのが私の願いです。それを含め、協議会の設置と、これまでの経緯をお話して、協議会に入りたいと思えます。(以下、説明)

資料1、おぶせミュージアムの設置および管理に関する条例5条、博物館法第23条第1項の規定による、ミュージアムには博物館法による条例に基づいて協議会を置く、という

ことに基づきこの博物館協議会を開催している。委員は学校教育及び社会教育の関係者、家庭教育の向上に資する活動を行う者、並びに学識経験のある者の中から、教育委員会が任命する、ということで、教育委員会の事務局とも相談しながら、今日お集まりいただいた皆様をお願いするということになった。任期は2年、補欠委員の任期は前任者の残任期間とする。協議会に委員の互選による会長を置くということで、会長の席は後に互選で選んでいただく。協議会の会議は会長が招集する。先ほどの博物館法23条というのが、公立博物館には博物館協議会を置くことができる、博物館協議会は博物館の運営に関し館長の諮問に応ずるとともに館長に対して意見を述べる機関とする、となっている。この協議会で私の方から提案したことに対して色々ご意見をいただきたい、という趣旨である。続いて資料2、平成4年におぶせミュージアムが開館した年に、第1回の博物館協議会が開かれている。その後、平成12年以外は毎年ずっと平成14年度まで開催されて、そこで途切れて10年近く開かれていなかったという現状がある。次第の方へ戻って、おぶせミュージアムの協議会博物館開催に至る経緯だが、課題等を含めて長くなるのでそれは協議会が始まって議題の方で少し説明させていただきたい。

4.任命書の交付

鶴田館長：委員を10名の方をお願いしているが、本日、関悦子委員、金田功子委員、関良幸委員が体調不良等で欠席となっている。原委員は所用で14時から15時ごろ途中で退席されるのということで了解願いたい。

5.委員・事務局紹介

(内容省略)

6.会長選出

鶴田館長：条例では互選によって会長を決めるという事だがどなたか意見はありますか。ようか。

浅岡委員：こういう会議に詳しい笹本委員にやっていただければ良いのではないかと思います。

鶴田館長：笹本委員という提案がございましたがそれでよろしいでしょうか。(拍手) 笹本委員がおぶせミュージアム博物館協議会の会長に選任されました。議事進行を笹本会長に委任します。議事の内容は、後日議事録としてHP等に公表していく予定です。議事録の作成のため録音させていただきのご了解願いたい。

7.議事

笹本会長：それではこれから議事に入っていきます。まずは館長から現状と課題について説明をして頂き、議事に入ります。

鶴田館長：資料 3 についてです。最初にミュージアムの現状ということで主に展示を取り挙げて、おぶせミュージアム 31 年間の活動、その後 2 番目として抱えている課題についてお話をさせていただきたい。

おぶせミュージアム 31 年間の活動について。平成 4 年にオープンして令和 5 年まで毎年途切れることなく企画展をやっている。ご覧の通り平成 5 年を見てもものすごい数の展示をやっておりそれがずっと続いて、基本的には美術品の展示ということで活動している。その中で中島千波氏の展覧会がかなり多くを占めている。春山文典氏についても 6 回ほど展示をしている。

今日一番お話したいことは 2 番目、おぶせミュージアムが抱える課題についてである。収蔵品の管理と保管、中島千波・美子氏の協力による館運営、広い庭園の管理、を挙げている。

収蔵品の管理と保管については、収蔵品の台帳・カードの不備ということで、本来完備されているべき収蔵品リストが、ある程度できているが、完備はしていないという状況があった。一昨年度から主に中島美子学芸顧問のご協力によって、写真撮影や台帳・収蔵カードの整備をしてきた。その一番の成果が先ほど山崎教育長からお話があった『おぶせミュージアム・中島千波館収蔵 中島千波作品集』で、求龍堂から刊行された。本来ならばこういったものは博物館が独自に出すべきものだが、それができておらず、中島美子学芸顧問に大変ご協力頂いてできたということがある。続いて、当館の収蔵品で一番多いのが中島千波作品で約 2,000 点、次が春山文典作品で 71 点収蔵させていただいている。この台帳も完全には整っていなかった。春山作品は今年度、台帳と収蔵品について確認した。作品の撮影は写真データとして十分なものがなかったので、今年度春山氏が館に来館して写真撮影をして頂いて 8 割ほど終わり、今年度中に全ての写真ができるという方向で進んでいる。その他中島千波氏の父・清之氏の作品も複数ある。その他は何点と言えないところが問題だが、地元の作家の収蔵品や中島千波・美子氏からご寄贈いただいた他の作家の絵画も多数ある。本来、美術館博物館として整えていかなければいけないところを、外のお力を借りてなんとかやっているという状況である。次に収蔵環境の劣化については、空調の老朽化及び故障が認められる。31 年経つが空調については、メンテナンスはしているが更新はしていない。古い機械のため不備も出てきている。そういった影響もあり、今年度 1 階収蔵庫の作品にカビの発生が確認された。その後、中島美子学芸顧問のご協力のもとで確認したところ、合計 24 点の作品についてカビの発生が確認された。これについては今年度の予算の中で修復と燻蒸の作業を進めている。次に収蔵庫スペースの不足についてである。当館は 1 階と 2 階ひとつずつ、2ヶ所の収蔵庫がある。2 階は開館当初のもの、1 階は平成 24 年に増築されたもので、そのスペースがほぼいっぱいになっている。収蔵庫内の通路に置いているので、言いようによっては 100 パーセントを越えているという状況だ。

また、博物館美術館で整理や調査研究するためのスペースが、おぶせミュージアムは残念

ながら完備されていない。こういう状況で30年来ている。お恥ずかしい話だが、それが現実である。

続いて2番目の議題の、中島千波・美子氏の協力による自立していない館運営について。企画に関しても中島千波氏および学芸顧問美子氏の人的・経済的な協力をいただいている。当館のミュージアムショップは結構人気があるが、ほとんどのグッズは学芸顧問美子氏の有限会社 空の委託販売となっている。寄贈・寄付についても、中島千波作品については約2000点余りのものが寄贈されている、購入資料もわずかにあるが、ほとんどが寄贈資料である。その他、令和4～5年のものには、機材、除湿器や除雪機、芝刈り機などご寄付もいただいている。特に草取りなど庭の手入れも令和4年度から中島美子学芸顧問のご協力で進められており、庭の管理は当館のみでは行えていないという状況である。

3番目の課題の庭の管理について。ミュージアムはかなり広い庭があるが、ここ数年その手入れがなかなか行き届かなかった。草が生えて少し荒れた感じになっていて、住民からの苦情もあり、当館の職員が草取りをしているが、中島美子学芸顧問にも援助をいただきながらやっている状況がある。このように町立の博物館としてなかなか自立していない状況がお分かりかと思う。今年度館長になり、特に収蔵品の整理・管理というものが十分でなかったということで、作者の中島千波氏と春山文典氏には大変申し訳なく、ご迷惑をお掛けしてお詫びを申し上げたいと思う。町民のみなさまにつきましても、町民の財産を預かっているわけで、館として管理が出来ていなかったということも、館長としてこの場で謝罪をしたい。今後それを繰り返さないように進めていきたいという思いで今回の協議会を開いた。笹本会長：まずは現状がどういう状況かということをごきちんと言ってくださいました。美術館・博物館にとって一番重要なのは収集・保管、収蔵品をいい形で次の時代に伝えていく、そして研究して展示すると言うのが一般的である。にもかかわらず、ここではその部分が非常に弱かったようです。弱かったことを確認したので、協議会では博物館の運営に関して館長の諮問に応ずるとともに、館長に対して意見を述べる機関とする、となっているために、議題は館長からの諮問に答える形になるが、できるだけ本来あるべき姿にするためには一体どうしたらいいか、委員の皆様にはご意見をいただきたい。非常に良かったと思っているのは、山崎教育長から決意表明をしっかりとっていただいた。いくらここで決めても、最終的には町当局がどうするか、というところでなかなか動かない場合がある。それを山崎教育長にはきちんと言え、やれないことは仕方ないが、少しでもやれるように皆で努力していきたい。それから委員の皆さんも、これからはすごく負担が大きくなります。我々も発言するからには責任を持たなくてはならない。その意味で共により良いおぶせミュージアム、より良い町の文化を創っていくために委員の皆様にはご尽力いただきたい。色々な形で皆様のお力をお借りしないと前に行けないので、よろしくお願い致したい。それは議題に入っていきたい。

(1) 令和5年度事業について

鶴田館長：常設展示について。当館は中島千波館、入って右側のところとそれ以外のところと言うように一応分けて構成している。今年、中島千波館の作品は年3回の展示替えをやっている。1階ギャラリーについては令和6年2月から春山文典氏の作品を常設展示する予定である。あとは屋台蔵に祭り屋台5台が常時展示されている。これについては特に展示替えなどはない。

企画展について。今年度4つ行われている。去年の12月から今年の4月まで「おぶせミュージアム・中島千波館 収藏品展」ということで3,000人ほどの来館者があった。次に4月27日から6月27日まで「日本芸術院会員就任記念 春山文典展 宙の響」を開催。春山委員の作品展示をして、その中でギャラリートークもやっていただいた。7月1日から9月26日まで中島千波さんのお弟子さんである5人の女性作家の「5つの道 わたしたちのまなざし」展。ギャラリートークは2回、中島千波氏を交えてしていただき大勢の方に観ていただいた。現在行われている『「日本画家 中島千波」って何者?』は9月30日から来年の1月8日まで。ポスターでは12月17日までとなっているが会期を延長して1月8日までということにした。11月12日現在で4,268人の方に来館していただいている。初日に中島千波氏にギャラリートークをしていただいて、その様子はGoolightで撮影しケーブルテレビでも流れた。

次は木造館について。ミュージアムとは別に離れがあり、日本家屋の貸館として地元の作家に展示をしていただいている。申込制、1日1,000円で貸し出している。本年度は6件の方が申し込まれて展示をしている。

続いて入館者数について。4月1日から11月12日まで13,970人。コロナもあるが、多い時はおおむね毎年2万人前後である。令和4年度と比べると2千数百人ほど少ないが、今年度から数え方を変えた。おぶせミュージアム・高井鴻山記念館・北斎館の3館を観られて少し安くなるという3館共通券というのがあり、これまでそれを買った人を全てカウントしていたが、中には北斎館・高井鴻山記念館には行くけれどおぶせミュージアムには来ない、という人もいたので今年は来た人の数だけでカウントしている。

資料貸出は2点あり、いずれも海外へ出ている。アメリカで活躍している画家の池田学氏の《巖ノ王》がカナダのオデイン美術館・クリーブランド現代美術館へ行き、その後アメリカの方に貸し出すということでまだ帰ってきていない。春山文典氏の《キュービック宙・華》は文化庁の韓国・中国共同3か国共同で開催している展示会へ行って先日無事に戻ってきた。続いて資料管理について。令和5年度寄贈寄託作品、寄贈寄託の一覧である。中島千波氏から寄贈を受けた《トナラの魚の月下美人》は、大分前にいただいていたが、手続き上のミスで今年度になっている。その他小柳景義氏や「5つの道 わたしたちのまなざし」展の4名の方の作品が収藏品となっている。また、歌舞伎座の緞帳の掛け替えに伴い中島千波氏原画の緞帳が処分されるということで、中島千波氏・美子学芸顧問から「千波」というサインがある部分を寄贈していただいて展示している。また春山文典氏から春の企画展で展示

された作品を5点委託していただいている。このように年々少しずつ収蔵品が増えている。次に施設等管理・修繕についてである。先ほどのとおり、非常に施設の老朽化が進んでいる。木造館の屋根瓦の修理、植木伐採や手入れ、庭手入れなど。最近庭は手入れが行き届いている、とお客さんに言われるようになったが、中島美子学芸顧問のご協力で毎月業者を入れて草取りをしているという実態がある。その他空調、エレベーターと灯油タンク（空調に関わるエネルギー）の点検を実施している。外の回廊天井が落ちそうなのでこの修繕を今年度行う。木造館の壁の塗り壁が落ちてきているので、それも実施予定である。

収蔵庫環境調査については、カビが生えたということで12月以降燻蒸など実施予定である。他には排煙口が壊れているなど、こういう小さなことが沢山あるが、今年度はこのような修繕を予定している。

続いて友の会についてである。友の会で総会を8月に行って、会員が会長を決めて活動をしている。総会を8月に行って、観光客の方に案内をしていただくボランティアを行った。また、研修視察を1月以降予定している。

その他、休館日については、令和6年2月から毎週水曜日を休館とする。これは、条例上は水曜日休みに定められていたが、今まで年中無休で開館をし、館のメンテナンス等出来ないという状況があったので、条例にある通り週一度休みを入れ、その時にメンテナンス等ができる環境をつくろうということで、先日教育委員会にも了解を頂いたところである。令和6年1月9日から22日までの臨時休館については、先ほど言ったように収蔵庫の燻蒸および収蔵品の整理等館のメンテナンスを進めていく。令和5年度はこのような形で進めていきたい。

(2) 令和6年度事業計画について

鶴田館長：基本的には令和5年度を同じだが、1階ギャラリーで春山文典氏の作品の常設展を今年度2月から始めて、来年度以降も続けていく。企画展については4月から郷土の作家展、7月6日から10月まで中島千波氏のお弟子さんの3人の方に展示をしていただくということで現在進めている。秋からは中島千波展、冬は収蔵品展ということで企画展の大枠が決まっている。来年度しっかりやりたいところとして、例年は次年度の企画展を計画して動いているが、企画展のためにはそれなりの研究も必要なので、準備が間に合わない。令和7年度の企画を立てることはもちろんだが、8年度以降について計画を立てて、その中で年4回が妥当なのか、ということも含めて計画立案したいと思っている。

資料の貸し出しについては随時行う。

資料管理については台帳の整備を進めたい。

作品の寄贈に係る審査会の設置については現在、作品の寄贈について特に決まり事がない。今までは寄贈するという申し出があれば受け入れていた。ただ収蔵庫がいっぱいになり、今年度何件か地元の方からお問合せがあったが、事情をお話して今すぐには受け取れないということでお断りをしている。しかしそれは学芸員などの個人の判断になってしまうので、受け入れを複数のメンバーで審査する審査会を設置する方向で進めたい。

次に収蔵品整理と収蔵スペースの確保の検討についてである。先ほど言ったように収蔵スペースはあるが、整理する場所がない。博物館美術館の重要な役割である点検作業を物理的にできないということがある。これをどうするのか、検討しながら進めて行きたい。

次に施設等管理・修繕についてである。回廊の天井を今年度修繕するが、予算の都合で全部はできない。残りの部分は来年度以降実施する。空調の点検については令和5年度通りである。大規模修繕の詳細計画立案はかなりお金がかかるので、数年後を見通して細かい計画を立てていくことが大事である。

次におぶせミュージアム友の会について。活動内容は今年度通りだが、年会費1,000円をもっと上げてもいいのではないかと、という声もある。会員募集の範囲は現在、小布施や須坂・中野くらいを対象にしているが、それに限らずもっと広げて行くことを検討しながら進めていきたい。

笹本会長：協議会は何回やることになったのか。

鶴田館長：今年度はこれで終わる予定だが、来年度以降は年に2回程度やる方向です。

笹本会長：終わったことの確認と来年度の予定、そしてそれぞれの所の問題点をしっかり出していくためには2回はやっていただきたい。もう一点、書類に金額が一切入っていない。予算が記されていないと、何をやっていくのかということが見えないので、必要経費その他分かるようにしていただきたい。その方が論議しやすい。

個人的な感想を言うと、本当にこんなにずっと展示をやっていていいのか、と思う。学芸員は死ぬ思いだと思う。私達の所（長野県立歴史館）もあれだけいても、一人の人が展示を担当するのは2年か3年に一回が普通。多くのお客さんに見せるという側面だけではなくて、きちんと研究して次の時代に繋げていくとすると、先ほど館長の方からは令和6年度の企画展の開催回数が妥当か、という話があったが、普通に考えたら多すぎるのではないかと思う。お客さんの層が、例えば観光客の方であればむしろ減らしてもいいし、市民の皆様の要望が多いのであればそれはまた考えないといけない。そう考えると入館者の割合が見えてこない。全部はとても不可能だけど、町の方たちが何パーセントで、町外の人や北信の人が何パーセントという、何らかの情報がないと論議のしようがない。その点はぜひ基礎的な作業としてやっていただきたい。私たちも真剣に論議するために材料があったほうがいいのでその点ぜひお願いしたい。

中島委員：中島です。31年目が経っているが、最初から、個人的に館の運営に入ってしまうと非常に困るということで、町が独自にやると（というスタンス）。ところがこれがなかなか難しいので、中島家が随分と入ってきているんなことをやっていた。学芸員が一人じゃ到底無理、それから経費の点でもなかなか大変、ということで、中島家が随分と費用を負担していた。暗黙のうちにそういうことが随分とあったので、非常に中島美子学芸顧問は頭に來ていた。それが溜まりに溜まったということもある。美術館としてやっぱり、これから丁寧にやってほしい。それから美術館が31年経って相当傷んで來ている。収蔵作品は中島千波のだけでも2,000点ある。それから春山文典氏のも随分と寄託と寄贈があるみた

いなので、それらを使った展覧会を順次やっていけば、そんなに費用はかからないと思う。借りてくるという費用が相当大変なので、落ち着くまでこの2人だけでも別段何ともないのではないか。

笹本会長：申し訳ないが聞いていると、おんぶに抱っここの印象を受ける。これは町営の美術館なので、例えばお手伝いいただいた時はわずかでも日当をお支払いするなど、きちんとしたシステムをつくらないといけないのではないか。そしてこの後の議題になってくるが、この町の美術品の収集方針はどういうもので、何を集めないといけないのか。寄贈いただいたから受け入れてしまうと、小布施町の美術館、ミュージアムがいったいがどの方向に進むのか全く見えてこない。非常に極端かもしれないが、中島千波氏のものでもこれはちょっとね、というくらいの度胸を決めてほしい(笑)。有名な人だからもらうというレベルではなくて、町としてはどうしたいのか。今まで幸運にもここは、どちらかという観光客で成り立っていた。そのゆえに、美術館や博物館が観光客用になっている。しかし、本来は、お金を出しているのは町民のはずなので、町民がどれくらい来て、どれくらい町民が喜んでくれるかが問題だと私は思う。今館は、町民はタダというような制度はあるのですか？

鶴田館長：町民は65歳以上と中学生以下が無料です。

笹本会長：私はあちこちで言っているが、小布施はすごく良い図書館を持っている。図書館へ入るのにお金を取っていますか。図書館は本来美術館博物館と同じ施設です。取ることもできる、とは(博物館法に)書いてあるけれども。はっきり言うと、博物館・美術館に町民のみなさんが非常にたくさん来るわけではないので、来てもらってなんぼ、という発想で行くのであれば、町民であることが証明できればタダにするべきだと私は思う。見てもらうということを皆で考えて、そのためにはいい展示をしていく。いい展示をしていくためにはたくさん企画展を開くのではなくて、心を込めて展示ができるようにしていった方が良いのではないか。

霜田委員：今、館長の説明を聞き、そして学芸員のお二人が新しく4月から来たということで、非常に胸が痛いというか、大変だろうなというのはすごく感じた。やはりどこでも、市町村立だととても規模が小さくて、学芸員1人か2人というのが長野県内でも多い。その人数で回さないといけないとなると、美術館が土台に立つべき調査研究がどうしてもおろそかになっていってしまう。結局、何かやっていないといけない、とにかく言われたものを出す、というかたちで自転車操業だった、というのが今のご説明や、過去の例だったのか。中島委員の奥様などにすごく頼られていたということを感じた。ただ、こういう会を新たに開いて、決意表明のようなことを行われたということは、おぶせミュージアム、そして小布施町として、ここを変えていきたいという志はすごく感じている。当館(長野県立美術館)もリニューアルしたばかりでとても注目されて、とにかくどんどんお客さんを呼ぶために展覧会を数多くやれというようなことで、やみくもに展覧会をしたが、そうすると本当に学芸員などの中の間人が疲弊してくる。昨今の働き方改革というものもあるが、やはり中の人がある程度余裕を持って楽しく仕事ができないと、心を打つ展示ができない。荒んだ感じが

出てしまうというようなことも、中にいる人間だからこそ感じたところ。実は当館（長野県立美術館）もできるだけ業務を削減しつつ、しかしお客さんと呼べるような何かを模索しているような状況。例えばイベント・ワークショップなど、いわゆる教育普及事業にも力を入れて、地元の人や学校に来て頂いて当館で色々学んで頂くといったような、展示以外のやり方を取り入れている。常設展示室では、当初、作品を展示する期間が最長2か月弱など決まっているので年6回、2か月ごとに展示替えをしたが、飾る物を変えることによって少し期間を延ばして、年間5回で済ませるようにするなどの合理化をはかっている。企画展も4回というお話だが、そのうち2回は常設展のようなものだと、借用に行かないのである程度手間がかからずに展示ができるのではないか。その様な工夫をして、少し一つ一つが濃い、しかし期間はある程度長い展示をやっていけばいいのではないか。

中島委員：この資料に載っていないがワークショップは夏の8月に数回やっていた。美術館ではできないので、中学校の教室でやるのだが、地元の子達が少ない。なぜか全国から来てしまう。それで男の子はいなくて、女の子ばかり無理やり先生が連れてくる、という感じになってきて。ここら辺がちょっと歴史の中に書いていないのが、どうかな、と思う。今は県立美術館でもちゃんとワークショップをやっているということですし、これはやらなければいけないこと。

笹本会長：私が凄く素敵だと思う美術館のひとつに、丸山晚霞記念館というのがあって、その佐藤さんという学芸員の方が本当に子どもたちのために働いている。やっぱり学芸員が地元の方に尽くせるようでないといけない。今のようになくさん展示をやっていたら時間もなくて、子どもたちに接して何を見出してほしいのか、ということが明確でなくなってしまう。ワークショップの件も、学芸員がやりたいことをやれることが大切である。私の大好きな美術館のひとつに朝日村という小さな村が持っている美術館がある。そこは収蔵品があるのではなく、え、こんな展示をするのか、というのを学芸員がやっている。それぞれのやり方があるが、いずれにしろ働く人にとって何が一番原動力になってくれるのか、ということを考えてやっていきましょう。

春山委員：私は美術団体に属していて、その運営というのは会員の会費・出品料・入場料が全てです。それで全国での巡回展や展覧会を東京都美術館、国立新美術館などやっている。そういった運営に携わっているが、逆にこちら側の立場でこういう資料を見せていただいて、考えさせられることがある。やはり気になるのはお金の点。先ほど会長がおっしゃったようにお金が書いていないから分からないが、これも町営の美術館ということは、本当にこういうことを全部、町予算の中で可能な話なのか。美術館だけの希望で実際どうなのか、というのがちょっと見えにくい。それから作家の立場で言うと、美術館の役割に理想を持っている。やはりこの地域に設立されて、作品を公開・展示して、それによりいささかでも小布施町の発展に、直接的、あるいは間接的に役立ちたい。先ほどのように、例えば観光客が増える、ということで相乗効果にもなる。この町のことをあまり分からない方もこの美術館に企画されている展覧会を観てくださることによって、またその一人ひとりの輪が広がっ

ていき、それがやがてまた還元されていくということがあるのではないだろうか。具体的な話ではないがそういう役割を持っている人同士が話し合うということですので、よろしくお願い致します。

笹本会長：今の件は今後、この博物館を活発化していくために最低条件必要になってくる。博物館・美術館は何のためにあるのかという根源をみんなで考えながら、町民に対してきちんと説明できるようにしたい。先ほどの、中島委員には申し訳ないけれども、例えば手伝ってくれたのだったら、それは日当に換算したらいくら相当だから、寄付を頂いたという形でも良いから、分かるようにしておかないと。特定の個人だけの奉仕のような形だと客観性が薄れてきてしまう。その点ではしっかりとした仕組みを作っていただきたい。

浅岡委員：中島先生と春山先生が小布施町出身だということで、町に軸足を置いたような館運営に基本的にはなっている。地元の皆さんが年に1回ではなく、多く来て、中島先生、春山先生の作品や、関連性がある作品に親しんで、子どもも含めて町民が小布施に生まれて良かったな、という意識になることが一番大事だと思う。それと先ほど館長から出てきた友の会の活動、全国に広げるといふ事も言われていたけれど町の会員が多いと思うが、それを活発化し、その活動を通して町民の皆さん、友の会の皆さんの方からこういうところがあるんだよ、というような感じで伝わっていけばいいと思う。草取りとか地域のみなさんにおんぶしてもいいから、会員のみなさんも含めて草取りへ行ったら良かったと、そういう感じになれば館運営に町民が参画したという意識が広まっていいと思う。中島委員が言われた、学習会とか最初の頃は中学校でやった時に、町の子どもが多かったですよね。今はお聞きしたら少ないということでしたが。もちろん地元の小中学校や、修学旅行などで泊ってこちらへ来る子供もいる。そういうのも含めて小中学生の啓発が必要だと思う。中学校の副読本の中に博物館もあるし、郷土を知る学習の一環として美術館・博物館を小中学生の総合的学習でやる機会があると思うので、ぜひカリキュラムへ入れて美術館へ行って見て、家へ帰ってから良かったと親に話して、子どもを通して親を啓発できることもあるのではないか。今日は中島委員、春山委員のお話を聞いて非常に良かった。それから館長は専門的な立場に入ったということで、今までできなかったようなことが可能だということで、大変ありがたく嬉しく思う。

笹本会長：次の時代を創っていく子供たちに何を渡していくかということをしつかりと考えていかなければいけない。だからこそワークショップの問題もあるし、そのためには最低条件として良いものをきちんと保存していく、そして説明していかなければいけない。私が関係している安曇野市で行っている学校ミュージアムなど、地域ですごく頑張っていて、場合によると、画家まで招いてその場で描いてもらうようなこともいっぱいやっている。そういうこともやりたい、と学芸員が考えられるような、余裕を何とか持たせた上で未来へつなげていきたい。

池田委員：皆さんのお話をお聞きして、美術館の大事さ、すばらしさを実感している。またこれから、特に子どもたちに対して美術館がどういう役割を果たしていけるのか、という可

能性をうんと感じさせて頂いた。そしてこういう美術館があるということを、町民として大変誇りに思うし、だからこそ一層この美術館を大事にして、もっともっと良い物にしていきたいと思う。私も教育の仕事をずっとしてきたが、子ども達と美術館、ということについて実はあまり考えたことが無い。でも今のお話を聞いていると、ああ、なるほど、と思うことが沢山ある。ぜひ、子どもたちの美術館ということについて、これからもっと企画して大事にしていてもらいたいと思う。それにしても最初に笹本会長がおっしゃったように予算とか決算とかそういうことが今日の資料にも一切なくて、なぜそんなかたちの今日の資料なのか、その辺もお聞きしたい。それがなくてはこの協議会の話し合いも身になってこない。笹本会長：これは委員の方で要求しなければならない。逆に言うと私達委員としては、言った以上責任をとらなくてはいけない。今日、どうしてないのか、というのは恐らく鶴田館長のことだから気が回らなかったということだけだと思う（笑）。彼は私の所の部下だったので状況は分かっている。今後は、そういうかたちにしていきます。私はすごいな、と思っている所のひとつに、先ほどの安曇野の学校ミュージアムで、豊科近代美術館の高田（博厚）さんの作品を、彫刻は見ただけでは分からないから、あなた方はうちの市の子どものために特別に触らせてあげよう、ということをやっている。美術作品は、皮膚感覚からの感動がすごく大きい。そういう意味では例えば、中島委員に子どもたちのためにしゃべっていただけませんか？とか、春山委員、自分の作品について説明してください、というようなことができるようになってこないといけない。協議会はおぶせミュージアムの皆さんを動かしやすくするための応援団です。ややもすると、博物館協議会は諮問機関と言いながら、何をやったかをチェックばかりしているが、そんなものではない。私達はこの地域が良くなるために何ができるかを考えている。僕の方から言うと、美術館だけでは困る。歴史的な博物館を含めて色んなものを総合的に見せて、はじめて本当の博物館になっていくはずである。しかも博物館は展示されているものが全てではない。地域を歩いてもらって、色んな発見ができるというようなかたちに持っていきたい。

今の議題の（１）、（２）に関して、わざと長くしたのは、こうやって一回やっておくと、だいたいそれぞれの言いそうなことが分かる。お互い気心が知れていなかったら言いたいことも言えない。

（３）施設修繕計画について。

鶴田館長：資料 7 は、今年の 2 月に設計事務所に提案を頂いた内容である。それを含めて今年度の改修から定期的に立案している途中である。概要について、平成 4 年に館ができて、平成 24 年に 1 階収蔵庫と 1 階喫茶室の横の休憩室を増築した。カビが生えてしまったのはこちらの増築した収蔵庫です。その後の改修歴は一つだけ、空調するにあたって石油を燃やして暖房・冷房やっているが、その中の温水発生装置が壊れたということで令和 2 年にコロナ関係の補助金を使ってそこだけ直した。ただ、その先のパイプや施設については手がついていないという状況。30 年間での大きな改修を並べるとこういう状態になっている。4 の

右下の所、設計事務所の方から実施に向けた検討ということでケース 1・2・3 と出してもらっている。全面に一気に改修するのがケース 1。ケース 2 は短期修繕と中期修繕を、5 年前後を目安に実施、長期修繕を 10 年以内実施、ということで 2 段階でやっていく。現実的に可能なのがケース 3 で、短期、中長期、長期の順で実施というもので、3 段階に分けて実施する案。修繕工事リストに沿って見ると短期はどうしてもやらないといけない、というものも含まれている。冷却塔の更新、クーラーについてはオープン当初のままで、かなり大きな騒音が出る機械なので、近隣からの苦情等を配慮しながら稼働している、という状態である。廻廊部分の軒天パネルおよび樋の交換、というのはお客さんにも危ない状態で、今、そこに入らないように工夫をしているような状況である。LED 照明器具の更新は、ほとんど手が付いていないという状況である。中長期については内装、エアコン等の、空調の関係を大きく全面的に変える。3 か月から 6 か月くらい、場合によってはもっと長く休館して工事をしないとイケない。長期計画も含めて全体の費用の見積りは出していないが、何千万では済まない金額になる。長期計画では耐用年数が過ぎてくる屋根部分の交換や地下オイルタンクの更新がある。電気を使わずに石油が全ての空調のエネルギーになっている古いタイプの空調施設を使っていて、どのようなタイプの空調設備とするのか良いのか、ということを検討しながら実施している。この辺の細かなことを具体的に詰めていかなければならない。もっとこうした方がいいというようなことがありましたらお願い致します。

笹本会長：このままだと、町民が本当に必要としている美術館・博物館という説明にならない。言っては悪いが説明は館の側の論理であって、いつもたくさん来てくれている町民の方からこういう声が挙がっている、たとえば、何とかしましょう、と議会などを動かせるが、今の話はあくまでも館長と館の側なので、そこの埋め方をどうするか、考えていく必要がある。それから町当局の側で予算の問題があるので、要望は良く分かるけれども、町の方は順序として先にこれを置かなきゃいけない、ということもある。まず動きのひとつとして池田委員や浅岡委員の意見を前提にしながら、委員の皆様にも少しリードしていただいて、先ほどから何度も言っているように、ワークショップその他を含めて市民にとって本当に集いの場所として、あそこの場所はこれでいいのか、ということをしつづつ言ってもらえる環境をつくっていきたい。必要かどうかについて最終的に町民から声が上がってくる、ということがないまま行ったら、まずいだらうと思う。ぜひその点は考えていただきたい。それから町の方の長期計画に 1 点でも入っておかないといけない。恥ずかしい話だが私共の長野県立歴史館が来年 30 周年で、何とかリニューアルを、とずっと内部で言ってきたも、県の 5 か年計画に何も入っていない、という言い方をされてしまう。

ここに出てくることは全て重要である。けれども全てできないとしたら、どこまで館としても譲歩できるのか。もう一つは市民の要望がどこまで上げられるようになっていくのかをお考えいただきたい。

中島委員：31 年間やっていて、一番感じたのは、町民の皆さんがあまり関心ないということ、それをすごく感じる。なぜかというと、美術館に見に来ない。最初のオープニングには

ちゃんと来るけれども……。それがずっとだったので、これは何とかしないとイケない。その所をもうちょっと町の方が考えてくれないと何ともできない。

笹本会長：学芸員になっているということは中島先生の作品や春山先生の作品がいいな、と思ってなっているのだと思う。先ほどのとおり学芸員が主体になって、それを伝えられるようにしていかないと、子ども達に感動もない。天下の中島千波氏が行ってもいいよ、という風になっていくと、変わってくる。変わっていくための種まきをみんなですていかないと、形だけ言ったところでどうにもならない。他所では本当に頑張っている人たちも沢山いるので、私達も頑張りたいし、今日の雰囲気分かるようにここにいる委員はみんな、おぶせミュージアムの皆さんを応援するつもりで委員としてやってくれている。やれないことはそう言って結構ですので。私はこれをやりたい、ということが出てきて、子どもたちに影響を与えてほしい。一番簡単なのは展示会を一回やめて、小布施町の子どもたちの作品展をやると、親が沢山来る。その時に様々な仕込みをすると形が変わって来る。絵の描き方だってその時に一言、あの天下の中島千波氏や春山文典氏が「ここはいいんだけどね、ここを直したら」と言ってくれれば、それで一気に伸びてくる。だから今までと違うような、私達なりの方針を固めていきましょう。それをミュージアムの大規模改修につなげていかないと、大規模改修だけをポンと言っても、おそらく町の方だって困る。この間ある県に行って、よくこんなに文化財やれるね、という話をしたら、実は市長の票を担っている人たちはみんな文化が好きで、文化が好きという事で票になっている、と言われた。ここも、文化にきちんと理解を示していただけるような雰囲気をつくってほしい。やはり文化に力を入れると町が良くなる、図書館だけ良くなってもダメで美術館、博物館が良くなればもっといい。第二の春山、第二の中島はどれくらいつくれているのか。突出した人たちだけがポンと出て終わりだったら、美術館の意味はなくなる。ぜひ頑張ってください。

中島委員：今の議長さんの意見を聞いていて、この小さな町、村でしたよね、確か。そこに同じ時期に立体作家と平面作家が出るというのは、本当は奇跡なのです。にもかかわらず、うまく使っていないというのが、非常に勿体ない。

笹本会長：今の話は自分たちを使っているよ、という話ですからね。(中島委員：そうです。)
私が大好きな美術館のひとつに、辰野東小学校というところにあさひ美術館というのがあ。そこは中村七十さんとか瀬戸剛さんとか非常に面白いブロンズ作家がいて、中川紀元の作品がある。さらにこの地からは有賀喜左衛門とかいうような社会学のとんでもない人が出ている。正に文化がひとつに凝縮されている。ただその文化の凝縮された地域で終わったら意味がないわけで、その文化の凝縮をどうにかたちで次の代に伝えていくか、が博物館の役割。その意味でこれから館長は真面目にやると今日宣言しています(笑)。山崎教育長が後ろで支えるという話ですから期待しましょう。そうしていかないと地域はよくなりません。

中島委員：僕は東京藝大で教えていて教え子が沢山いる。それから春山委員もずっと横浜美術大学教えていたわけだから、その教え子もいる。ということは、いろいろ使えることがで

きる。年寄りが出なくても、若いのを連れてくることできる。

笹本会長：美術館が本当に豊かになるというのはこれなんです。作品を並べることはある意味誰でもできる。でも、地域の芸術家がいってくると、地域の人達と共に動けるようになる。それを最後には目指すくらいになって、作品の数よりも未来にどれだけの人を残せるかを美術館のみんな目指せるようにしていきたいと思う。大規模改修に関しては、まずはしっかり足元を固めて、内部で論議して、そして順序を決めてください。必要だけれども全部一括はできないとすると、必要な中でも一番、二番をきちんと決めて予算の問題と、交渉していく。ただし我々委員会としてはちゃんと任命書を貰ってやっているわけなので最低こっちはやってほしい、ということは要望すべきだと思う。そのためにもずっと同じトーンじゃなくてここのところをぜひ、と強調するかたちで議題に出していただければと思う。

(4) 寄贈作品の受け入れについて

鶴田館長：これについて資料はないが、議題として出したかったので入れた。先ほどの報告の中であったとおり、寄贈作品の受け入れについては特に決まり事がこれまでなく、ほとんど受け入れてきている。非常に数が多いというわけではないが、実際にいろいろな作家の方の作品が入っている。ただ今年度はもう収蔵庫がいっぱいの状態で、寄贈すると言われても物理的に無理という状況が出てきてお断りしているが、それが個人の判断になってしまっている。やはりこの館として何を集めていけばいいのかということも含め寄贈について審査する委員会が必要ということで、設けるにあたって、この協議会のメンバーにご協力頂きながら進めていきたい。

笹本会長：まず収集方針がしっかり決まっていない。それを決めておかないと。こういう理念に従って小布施町は美術品を集めます、博物館ではこういうものを集めます、と宣言しておかないといけない。方針がないから、「差し上げます」と言われたらもらわざるを得ない。その時に、今後のことを考えてほしい。今、霜田委員の所でいうと、若手のどっちにいくか分からない人を一生懸命持ち上げて（笑）それでやっていくというのもあるし、次の時代を創っていくために、大家は大家として、でも若い人たちに賭けてみよう、とか、そういう収集理念をまずはきちんとうたって、一回みんなで論議してほしい。それから一番足りないのは、私の感想だと収集の費用です。形だけでも、年間50万でもいいから、きちんとうちはそのための費用を捻出します、と。そうすると今まで気が付かなかったけど、この作家の作品を買きましょうとか、お二人の先生については、すみません、こっちの方が優先するので寄贈して、ということが言える。若手で、あるいは既に失われそうなものなどに関しては、きちんと収集費用を見積もっていかないと方針ができない。

中島委員：美術館で一番大事なものは収蔵庫。それと同時に館長が言ったように場所がないからいらぬ、というのではない。場所がなくても、欲しい作品はもらう。もらうというか、買ってでもいいくらい。それと同時に、値段ではない。その作家が、ここの美術館ならタダでもいい、と。でもちょっと払ってくればありがたい、と。そのくらいのものじゃないと。

それと、選ぶ時の考え方。それは何人かの委員を決めて考えながらやっていくことが一番大事だと思います。

霜田委員：当館でも例えば上田市のデッサン館コレクション、あれを一括して長野県の方で購入させていただくことができた。コレクションポリシーというのが美術館は必ずあるものだと思っていたが、それが定まっていないという感じでしょうか？

鶴田館長：私の不勉強かもしれないが、私は認識していない。当館ではコレクションポリシーが定まっていない。

笹本会長：おそらく現状では何人かの委員の先生とかが寄贈してくれたりしたものでつくり上げてしまっている。こういう方向へもっていきたいという理念はつくっていかなくちゃいけない。だから、つくってほしい。

霜田委員：そうですね。それで今、時を経て大変になっているのだらうと思うのですが、やはりこういう美術館にしていきたい、こういうものを集めて、町民の皆様に観ていただく、というような方向性、ポリシーを決めて、それをHPなどに載せて、大体皆さんオープンにする。そうすると自然と、例えば画廊とかから声がかかるなど、作品も集まってきたりする。それでどんどんコレクションができていく。しかしそれをただやみくもに入れるんじゃなく、県の場合は、収集委員会という会をつくって、これは収蔵するに相応しいとかの適否を委員の方からご意見をいただいて、というかたちをとっていますので、そういったものをつくっていかれた方がよいかと思う。

笹本会長：今のお話の通り原案と、そのまま通るとは限らなくて、みんなの意見を言い合っていけばより良いものになりますので、その辺は何とかそうしていただきたい。極論かもしれないが、隣のある県の収蔵庫に水滴が一滴落ちた。このためにその館は、文化庁の審議で全面改築をさせられた。要するに伝えていくものを伝えられないということは、本当は恥ずかしいことなんです。例えばカビが生えたのは恥ずかしい事なので、それはきちんと明らかにして、こんな状況でこうなりました、と言う方が、インパクトが大きい。極端な言い方をしますと、中島千波氏の作品に水が落ちました、こんな状況でいいんですか？とインパクトをきちんと持たせながらやっていくくらいの覚悟がないと、作品を集められない。そして集めるときには学芸員は大変です。自分たちの地域からどのような作家が出ていて、どのような活動をしているのかって、すごく勉強しないとできない。そのためにも先ほどのとおり、企画展の数を減らしてでも、子供達に対応したり市民に対応するという美術館をつくったり、調査する時間をつくったほうがいいように思う。少なくとも早急に、町の美術館・博物館なら、収集の方向性を作ったうえで委員会を立ち上げた方がよいかと思う。

春山委員：今の話はどちらかというところからのおぶせミュージアムについて、改修、ハードな面だけの話だった。人的には運営はどうなのか。色んな意見を聞くと、企画展これだけ、とても2人じゃ足りないんじゃないかと。そういう、ハードと人的なことも含めて運営の出直しも必要だと思う。もちろん建物がなくてはできないが、どういう企画でやっていくか、というのは一緒に考えていかななくてはいけない問題なので。それはできないから我々手伝

え、というのであれば手伝いますけど・・・

笹本会長：春山委員がおっしゃったのは大変重要なことです。ただ学芸員の人数が町レベルでこれだけ多いのはあまりない。そういう意味ではここはまだ良くやってくれている。しかし、理想に燃えてまだ獲得しようとするのか、今いる人数できちんと回せるようにしていくのか、そこはある程度みんなで考えていかないと。理想論を言い始めると博物館美術館は国立美術館とか国立博物館並みにならないと無理になる。あなた方いろいろ言っているけれど、それだけお金出してくれているんですか、と言うと大人しくなるんですけれども。僕は極端に増やしても大変だろう、という気がするので、今いる人たちがどうしたら学芸員としてやりやすくなるのか、その辺を含めて諮問をしていただければ、私たちは諮問に対して意見を答えたいと思います。春山委員が言ってくれたことは大変重要な指摘です。

(5) その他

鶴田館長：事務局からは特にはないです。

笹本会長：フリーパス券をぜひ欲しい。委員の皆様にはいつでもどこでもフリーパスで、美術館・博物館に入れるような体制をとっていただきたい。日常的に見もしないで感想を言ったところでどうしようもないので、特に町民委員の皆さんは日常的にどンドン見に行っていて、あそこがいい、悪い、をきちんと行っていただきたい。私がやっているところで言いますと、初めは皆壮大なことばかり言っていたのが、そのうちにトイレの掃除が良く行き届いているとか、職員がやる気になるようなことを発言をしてくれたり、良いんだけどもう少しここを工夫したらどうですか、というようなことを言っていただけるようになってくる。私を含めて来たときにぶらっと、どこの小布施町の博物館美術館でも見ていただけるような体制をつくっていただきますと、また意見を言いやすくなる。この点は事務局もそんなに問題はないはずだと思いますけど。

鶴田館長：フリーパスをお送りしたいと思います。

中島委員：美術家連盟に入っている人は皆タダで入れる。

笹本会長：本委員会としてきちんとそれを保証していただかないといけないので。春山委員の場合はお持ちかもしれないけれども、2つ渡せば2倍見てくれるという事で（笑）

中島委員：専門家の人は別でもっと大切なのは普通の人に見てもらおうということだよ。

春山委員：あとは寄付ですか。1,000円だか2,000円寄付すると・・・

鶴田館長：それは先ほどの友の会。友の会に入ると年間フリーパスがもらえる。

中島委員：24人しかいない。

笹本会長：中島委員から今、24人しかいない、って随分きついことを言われた。どういう風にして人を増やしていったらいいとか、少しずつ皆で考えながら、最後は、委員の皆さん、本当はおぶせミュージアム博物館協議会なんかやりたくなかったけど、やってみたら面白かった、と、言っていただけるようにしていく。そしてそれが何らかのかたちで実を結んでいくようにしていきますので。他に何かご意見ありましたら、いいですかね。今日は皆さ

ま顔見世興行で、この人はこういう人だとか、分かったかと思います。これから先、宿題もいっばいだけでも、皆で汗かいてもらわなきゃいけないし、特に地元の委員の方はさっきの雰囲気だと、草取りまでやっていただくことになるかもしれないということまで出てきましたけれども(笑)、地域を良くするために汗を流せるところは皆で汗を流していきたいと思いますので、引き続きよろしくお願ひ致します。なお、学芸員の皆様、事務局の皆様には勝手なことを申し上げましたけれども、これも地域を良くするためだということで、ご協力いただけたらと思います。それでは本日の議事はこれで終わりにさせていただきます。

8.閉会